

令和4年度

行政政策学類

学校推薦型選抜

小論文
問題冊子

時間 90 分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子はこの表紙を除いて、1枚です。
また、この冊子とは別に資料集、解答用紙、下書き用紙があります。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の受験番号欄には、必ず、受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。問題冊子及び資料集、下書き用紙は持ち帰って構いません。

<資料>は、吉見俊哉『大学は何処へ 未来への設計』（岩波書店、2021年）の一部である。資料を読んで、下記の設問に答えなさい。

- (1) 傍線部①について、単に「ステイホーム」しているだけでは大学を守りきれないと筆者が考える理由を説明しなさい。

(1行20字詰め、15行以内)

- (2) 傍線部②「大学は、『世間』の風通しの悪さに穴を穿っていく『世間知らず』や『世捨て人』の集まりでなくてはならず」と筆者が考える理由を説明し、その上で大学での学びはどうあるべきか、あなたの考えを述べなさい。

(1行20字詰め、35行以内)

(注意)

解答にあたっては、解答用紙の1マスに1字を使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱うこと。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しおよび行を改めたときは、1マス空けること。

令和4年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

行政政策学類 学校推薦型選抜

本問は、吉見俊哉『大学は何処へ 未来への設計』（岩波書店、2021年）の一部を資料として用い、読解力や要約力、論理的思考力や論述力を問うものである。

資料において、筆者はグローバル化とパンデミックが表裏一体の関係で繰り返されてきた歴史の中で、大学の成立が移動の自由と密接にかかわっていることを指摘し、その上でコロナ禍における大学のあるべき姿を説いている。また、コロナ禍の日本で浮かび上がった「自粛」「同調圧力」といった特異な現象を「世間」の観点から捉えつつ、そこでも同じく大学のあるべき姿を説いている。

設問(1)は、単に「ステイホーム」しているだけでは大学を守りきれない理由を、グローバル化とパンデミックが繰り返す歴史の間で誕生し発展してきた大学のあり方から説明させることにより、読解力と要約力をみるものである。

設問(2)は、コロナ禍の日本で浮かび上がった「自粛」「同調圧力」を作動させた「世間」観念の特徴とソーシャル・メディア上での新たな展開、「世間」に対置される大学のあり方を捉えさせた上で、筆者の議論を受けて大学での学び方はどうあるべきかを論じさせることにより、読解力と要約力、論理的思考力と論述力を総合的にみるものである。

令和4年度
行政政策学類
学校推薦型選抜

小論文
資料集

時間 90分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 資料集はこの表紙を除いて、7枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出てください。

〈資料〉

吉見俊哉『大学は何処へ 未来への設計』（岩波書店、二〇二二年）

新型コロナ感染症の拡大は、いずれ収束する。いまだ第三波の感染拡大が深刻化している二〇二二年初頭の日本では、この収束が半年後なのか、一年後なのか、それとも二年後になるのを見通すのは難しい。政府の対策は後手後手で、大騒ぎしながら部分最適ばかりを繰り返すタテ割り日本の組織文化も変化していないから、さらに危機が深刻化すれば次に何が起きるかはわからない。それでもなお、三年後、四年後の私たちが、まだこの感染症拡大の渦中にいることは、おそくないのである。時代は、すでにポストコロナ時代に入っている。ところがその三年後、四年後の世界は、おそらくまだパンデミックの影響から抜け出せてはいない。それどころかその影響は、五年後、一〇年後でも消えていないだろう。影響は、長期化する。

たとえばコロナ危機で、大学のオンライン化は劇的に進んだ。この変化は確実にポストコロナ時代も続く。そして同じことは、多くの企業の在宅勤務にも当てはまる。つまり、郊外や地方に家を持って、テレワークやオンライン授業の日々を過ごす人々の人口は緩やかにでも増え続ける。それだけではない。オンライン化でコロナ危機を乗り切れば、大学は元に戻るのかと言えば、そうではない。むしろ、コロナ危機のなかで大学に起きたことは、それ以前から起きていたグローバル化の圧縮された姿である。したがって、ポストコロナ時代に大学が向かうのは、確実にそうしたより長期の歴史的な流れの延長線上にある方向となる。

だから私たちはこの問題を、半年、一年の単位ではなく、もつとはるかに長い時間のなかで捉え返す必要がある。何よりも、世界史的視座から捉えるなら、グローバル化とパンデミックは長い時間のなかで表裏をなして人類の営みを変化させてきた。

まず、今回の危機の先行例は、一九一八年のスペイン風邪、すなわちインフルエンザ禍である。それが、第一次世界大戦で大量の兵士がグローバルに移動していたことと不可分だったのは周知の通りだ。兵舎が感染の温床となり、米国の大戦参戦で大量の兵士がヨーロッパの戦地に移動したことで感染は世界に広がり、悲惨な大戦を終わらせる要因の一つともなった。ところがこのときには、ポストインフルエンザ時代が大戦後の大好況の時代と重なったため、パンデミックの記憶は「黄金の二〇年代」の繁栄によって早々に消されていった。

もつと遡るなら、一八一七年にインドからコレラが世界に拡散し、その後も一九世紀を通じてコレラ禍が世界各地で起きている。これには、同時代の産業革命を背景にした大英帝国のアジアでの発展と不可分の関係があった。コレラはカルカッタで流行した後、大英帝国の交易圏

となっていたアジア各地、中東、アフリカに広がり、ヨーロッパを恐怖に陥れた。ちなみに、コレラが日本を襲うのは一八五八年で、ペリー来航で日本が開国した直後である。これも、グローバル・システムへの編入と感染症蔓延の表裏の関係を示す典型例といえる。

より長い歴史のなかで、グローバル化との関係が際立つのは、一六世紀の天然痘禍と一四世紀のペスト禍である。一六世紀の南北アメリカ大陸では、天然痘が凄まじい勢いで広がり、先住民に大量死をもたらしたが、これはスペインの大航海者たちが持ち込んだ病原菌で、大航海時代と不可分の関係があった。米大陸の先住民社会には天然痘に対する免疫がまったくなかったため、コルテスたちが持ち込んだ天然痘が多くの部族を全滅させる。スペイン人が少人数でアステカ、インカの両帝国を易々と征服した最大の要因は、武力の差よりも感染症パンデミックだった。大航海時代は、パンデミックの時代でもあったのだ。やや時代が遡るが、古代日本で天然痘が流行するようになったのも、新羅など朝鮮半島との交流が活発化した六世紀後半からで、中国文明を導入して律令国家が完成していく八世紀前半に大流行している。

さらに一四世紀のペスト禍は、その後の世界史を大きく変えてしまう出来事だったが、その背景には、一三世紀にモンゴル帝国がユーラシア大陸を制覇し、旧大陸全域で人やモノの移動が活発化していたことがあった。モンゴルの騎馬軍団是北京から黒海までの草原ルートを驚異的なスピードで横断した。やがて、そこには無数の隊商の交易網が広がっていく。「一三世紀グローバリゼーション」とも呼ばれるこの大陸的統合により、中国北方で広がった疫病は容易に黒海に達し、そこから海洋ルートでヨーロッパ全域に襲いかかることになった。

つまり、人類史のなかで繰り返されてきた感染症パンデミック発生の背景には、常に様々な時代のグローバリゼーションが存在した。ペストや天然痘、コレラの病原菌を運んだのは、直接的にはノミやネズミであるとしても、ローカルな疫病をグローバルなパンデミックに転化させる主犯はいつも人間の移動と接触の拡大だった。だから感染予防は、古代から現在に至るまで、一貫して「移動の制限」が基本となる。グローバル化とパンデミックは、歴史を通じて同じコインの表裏である。

(中略)

重要なことは、こうしたグローバル化とパンデミックの長い関係史のなかでの大学の位置である。二、三世紀のヨーロッパに大学が誕生した最も重要な条件は、汎ヨーロッパ的に都市から都市へと渡り歩くことのできる移動のネットワークだった。このネットワーク上を、商人、職人、聖職者、芸能者、そして知識人が旅していた。

どこかの都市に、大変学識のある人物がいることがわかると、多くの学徒が何か月も旅してその都市に集まり学びの舎を形成した。やがてそうした都市の旅人たちは、地元の世俗権力の干渉を退けるため、学問の自由についての勅許をローマ教皇や神聖ローマ帝国皇帝から得て、教師と学生の協同組合、すなわち大学を形成していった。つまり、大学誕生の根底にあったのは、脱領域的な移動の自由であり、これこそが大学の自由の根幹をなすものだった。

(中略)

そして、長い周期で何度も繰り返されてきた感染症パンデミックは、何度も移動の自由を大幅に制限する動きを生じさせてきた。それは封鎖であり、隔離であり、監視であり、移動の禁止である。明らかに、この動きの延長線上に大学の自由はない。「新しい日常」が「大学の自由」と共存できるためには、単なる封鎖や監視とは異なる「移動の自由」への回路が、つまり越境や接触や対話の自由につながるもう一つの回路が見いだされなければならない。

実際、コロナ禍の渦中でも、私たちはいくつものそうした越境と接触、対話に向かうグローバルな動きを目撃してきた。最も大きな流れは、やはりオンライン化の急激かつ全地球的規模での浸透である。すでに論じたように、世界中のとてつもない数の人々が、わずか数か月でこのシステムに日々接する「新しい日常」に入っていた。



新型ウイルスが猛威を振るうイタリアで、パルコニコニーで歌い励まし合う人びと(写真: La Presse/アフロ)

しかし、変化はそれだけではない。ヨーロッパでは、封鎖が最も厳しかった時期に、家々のベランダ越しに、広場や街路を挟んで人々が合唱し、メッセージを送り合い、中間地帯をコミュニケーション空間に変えていった(写真参照)。さらには人種差別に反対して膨大な人々が、世界中でマスクをしながら街路を行進した。^①いかなる時代で

あれ、民主主義も都市も大学も、単に「ステイホーム」しているだけでは守りきれないのだ。私たちはなお越境し、接触し、対話し、主張し続けなければならない。そうした集合的行為こそが、都市を実現し、大学を支えるのである。二〇二〇年の春、世界で起きたことは、そうした長い歴史が示してきた知的営みの根本を、人々が今も理解していることの証左である。

ところが、コロナ禍の日本で生じた現象は、世界の多くの国とまるで異なっていた。日本では、政府は無策であり、公衆衛生も旧来からの保健所経由の仕組みを臨機応変に変えることができず、検査数もなかなか伸びず、休業要請も曖昧で補償も十分ではないという、ないない尽くしであつたにもかかわらず、第一波では欧米ほどには感染者が増えなかつた。そのいくつかある要因の一つとして、圧倒的に強いヨコからの同調圧力は無視できない。

コロナ禍の第一波をあたかも日本社会が乗り越えたかのように見えたのは、コロナ対策が必要とした「ソーシャル・ディスタンス」や「ステイホーム」と、そもそも「外」と「内」を区別する壁を立てがちな日本社会の特性が容易にシンクロしたからである。ここが、イタリア等のラテン系社会のハビトゥスとは大きく異なっていた。国家が強制せずとも、「自粛」を促すだけで、人々は概ねマスクを常用するようになり、家に引きこもり、外出を控えた。

つまり、コロナに対し、中国と欧米が「封鎖」によつて応じたのに対し、日本はまずは何よりも「自粛」によつて応じたのだ。日本社会で最初に「自粛」の政治が大規模に作動したのは一九八八年の昭和天皇危篤の際、二度目が二〇一一年の東日本大震災、そして二〇年が三度目である。最初の二回は、危機自体も日本国内でのことだつたので諸外国との比較はできなかつたが、今回はグローバルな危機である。比較をすれば、危機に際し、世界ではほとんど日本社会だけが奇妙な行動をとつた。つまり、感染リスクから同じように「ステイホーム」が叫ばれたなかで、日本では移動を禁じられた異なる人々がなお広場を挟んで声を交響させたというよりも、同調圧力のなかでもともと同質性の高い人々が同じ方向に自ら向かつた。

そもそも「ステイホーム」は命令形の英文である。国家が個人に、「家に止まりなさい」と命令するのだ。ところが日本では、この言明は命令形というよりもある状況を示す名詞句のようなものとして受け止められてきた。みんなが「家に止まっている状態」である。この状態をもたす主体は誰なのか？ 責任はいつたい誰にあるのか？ それがはつきりしないまま、かつて鶴見俊輔が論じた「お守り言葉」として、「ステイホーム」も「ソーシャル・ディスタンス」も氾濫していった。そして、それらの言葉の氾濫自体が、予言の自己成就的にある状態を出現させていたのである。だから日本の「自粛」は、きわめて呪術的でもあつた。

「自粛」を英訳すれば「self-restraint」になりそうだが、この英訳は、日本語の感覚をうまく表現してはいない。「restraint」する「self」が、必ずしも自分自身とは言えないのが日本の「自粛」だからだ。刈谷剛彦が指摘したように、「自粛」という言葉の奇妙さには、日本社会における「個人と社会をつなぐ関係」の歴史性、つまり「個人」の非在という歴史性が埋め込まれている。つまり、「個人の自己選択・自己決定のあり方を、その社会がどのように理解しているか、いわば主体をめくり、その社会が共有する知識の違い」が、ここに示されているのである（「自粛の氾濫」は社会に何を残すか）。

佐藤直樹によれば、コロナ禍の日本を覆っていたこの「自粛」の政治を作動させていたのは「世間」である。「世間」観念の起源は古く、古代日本社会にも存在したらしい。『万葉集』で山上憶良は、「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」と歌っていた。世間はつらく身もやせ細るようだが、鳥ではないから旅には出られない。がんじがらめの世の中では、簡単には自由人になれないのだ。もし、どうしても旅に出ようと思つたら、「世間知らず」か「世捨て人」になる他はない。この古くからの「世間」の力学が、近代化を経ても残存し、コロナ時代の日本でも強力に作動している（「世間のルール」に従え——コロナ禍が浮き彫りにした日本社会のおきて）。

佐藤のこの指摘は、西洋中世史の泰斗阿部謹也によつて深められてきた根柢を基礎にしている。阿部によれば、「世間」と「社会」はその構成の根本原理がまるで異なる。一方で、「社会 society」という概念は、「それぞれの個人の尊厳が少なくとも原則として認められているところではしか本来の意味を持たない」（「世間」とは何か）。明治以降、日本は西洋の諸制度を取り入れ、文化風俗も西洋化した。この西洋社会が前提にしていた「個人」と「社会」の関係はついに広がらなかった。なぜならば、「社会」と異なり、個人を前提とせず、むしろ人々の同質性や互酬関係、長幼の序を構成原理とする「世間」がすでにあり、社会秩序を維持する上ではそのほうが有効だったからだ。「世間」は、家族や地域、職場での日常的な営みやコミュニケーションのなかに美効的な観念として常に作動しており、人々はこれを社会的に存在している所与の事実として受けとめ、常に意識しないと生きていけないような状況に置かれ続ける。思想としてこの「世間」の圧力に異を唱えることはできるだろうが、日々の生活で「世間」を無視するのは並大抵のことではない。

佐藤と鴻上尚史は、現代日本の至るところで自粛権力を作動させる「世間」は、近代化を経ても日本社会に保持され続けた非近代的性格と、マス・メディアやソーシャル・メディアが媒介しあう閉塞的なメディア環境が連動することでいつそう強化されていると考えている。この議論に従うならば、日本で「世間」の影響力が近代以降も衰えなかったのは、まずはキリスト教のような超越的な神の観念が庶民までは浸透せず、イエやムラ、職場などの、自分が直接的に関係を持つ「身内」を越えた共同性の感覚が育たなかったからである。日本人の多数派は、「内」を「外」から守るために壁を立て、「世間の内側の人間に対しては非常に親切にするけど、外側の人間に対しては無関心か排除する」（鴻上・佐藤『同調圧力』）。日本にはそのような「世間」が積層しており、人々はそれぞれ「身内」のなかで「世間」のイメージを抱いている。そのイメージの同質性が高いので、それらが積分されていったところに、共同幻想としての「世間」が社会的事実として構築されていくのである。

こうして構築された「世間」が、その影響圏にある人々が外に出してしまうのを禁じる際に発動するのが、「他人に迷惑をかけるな」という呪文であり、またそのような何事かが生じてしまった場合、関係者は「世間体が悪い」、もつと深刻ならば「世間に申し開きができない」と

考えて、やたらと頭を下げる。つまり、「世間」から排除されることを極度に怖れるのである。佐藤らは、こうした恐怖が、日本社会の几帳面さ、規則を拘子定規に守り、逸脱することを周囲が防いでいく極度に強い同調圧力の根底にある感情なのだとしている。

現代のソーシャル・メディア環境は、こうした恐怖心を基盤にした同調圧力をさらに強化している。九〇年代以降、新自由主義路線による非正規雇用の増大、格差拡大のなかで従来の意味での「職場≒身内」感覚が崩れ始め、それ以前、すでに高度成長期からムラやイエの感覚は失われていたので、現代日本社会では、「世間」と言ってもその実体的な基盤はすでに脆弱になっている。まさにそのとき、人々の自己承認への渴望や不安をソーシャル・メディアが媒介し、社会の底に空いてしまった穴を埋める役割を果たしていくのだ。実体的なムラやイエや職場の心理的拘束力が脆弱化するなかで、人々はソーシャル・メディアでのやりとりに自己承認の場を見出していこうとする。そこで自分の感覚に近いと思える発言に「いいね！」を押し、ネット上にバーチャルな「世間」を成立させていくことに加担する。

佐藤と鴻上は、総務省の『情報通信白書』に基づいて二つの興味深い事実を指摘している。第一に、「SNSで知り合う人達のほとんどは信頼できる」とかという問いに、「そう思う・ややそう思う」と答える人の割合が日本人は極端に低い。ドイツ人は約五割、アメリカ人は約六割、イギリス人は約七割が肯定的に答えるのに、日本人で肯定的に答える人は約一割に過ぎない。つまり、人々は実はSNS上の出会いをあまり信用してはいないのである。

第二に、日本ではツイッターの匿名率が極端に高い。この匿名率は、アメリカでは三五・七％、イギリスでは三一％、フランスでは四五％、韓国が三一・五％、シンガポールが三九・五％なのに対し、日本のツイッターの匿名率は七五・一％に上るといふ。つまり、日本人は、概してネット上の関係を信用してもおらず、自分の実名を明かすことも少ないのだが、それにもかかわらず、そのネット上で自己が承認されることを求め、そのためにネット上で語られる「正義」に同調し、ネットのなかの「世間」の常識から外れる「他人」を攻撃する。明らかに、この高度なメディア環境のなかに広がるのは、ファシズムの心理である。

コロナ禍でその特異な姿が浮かび上がった「世間」の同調圧力は、日本社会の極度な「風通しの悪さ」を示している。日本では、欧米と比べてのみならず、他のアジア諸国と比べても弱い仕方ではしか社会の「風通しを良くする」仕組みが発達しなかつたのだ。たしかに中国のような共産党独裁国家の場合、風通しを封鎖する国家機構が強力である。国家の目に見える強制権力では、中国はもちろん、他のアジア諸国も概して日本よりも強い。それにもかかわらず、とつかむしろだからこそ、これらの国々では国家の垂直的な力とは異なる水平的な仕組みが発

達しており、それが幾分か社会の「風通し」を良くしてきたのである。

まさにここにおいて、それぞれの社会における「大学」の位置づけが決定的に重要な意味を持つてくる。近代化は、国家的な官僚制や工業化、軍隊や学校の整備としてまず進んでいくわけだが、同時に都市化やメディアの発達の中、ジャーナリズムや学芸、様々な専門において横断的な「学会 Society」や「公共 Public」も形成していく。そのような二重のプロセスを近代化は構造的に孕んでいる。大学は、本来、中世都市を渡り歩く知的旅人たちの協同組合として出発したという意味においても、また「研究と教育の一致」を旨としたフンボルト原理における「学問の自由」の考え方からも、国家的な学校制度の延長線上にあるのではなく、むしろそのような垂直性を横断する水平的な風通しの良さを本質としてきた。そうだとするならば、必然的な理由をもって、^②大学は、「世間」の風通しの悪さに穴を穿^よつていく「世間知らず」や「世捨て人」の集まりでなくてはならず、まさにそのような「世間」の常識の外に立ち、それらを横断する外部性こそが、真に学問的な知的創造を生むはずである。

(注1) 個々の集団に特有の無意識的な行動・知覚・判断の様式。

(注2) 根拠のない噂や思い込みであっても、人々がそう思っているように

その予言が結果として本当に実現されてしまうこと。

(問題作成の都合上、本文の一部を省略した。注と一部のルビは出題者がつけたものである。)